

いわゆる「副詞の呼応」とテキストの結束性

木下りか

武庫川女子大学文学部

kishita@mukogawa-u.ac.jp

1. はじめに

副詞「たぶん／多分」（以下「たぶん」とする）の文末には「だろう」が共起する傾向が強い。

表1 副詞と文末表現の共起（数字は出現数を示す）

	ダ/φ	カモシ レナイ	ニチガ イナイ	ヨウダ	ラシイ	ダロウ マイ	ハズダ	シソウ ダ	デハナ イカ	その 他	合計
工藤(2000)	19	3	1		1	74	2	2	1		103
杉村(2009)	86	7	10	1	9	252			10	10	385

コーパス（工藤(2000):近現代の小説、杉村(2009):青空文庫）

しかし、「たぶん」と「だろう」は意味の類似度が高く、「たぶん」の役割すなわち、例文(1)と例文(2)との差異を読み取るのは困難である。

- (1) たぶん明日は晴れるだろう。
- (2) 明日は晴れるだろう。

本発表は、「たぶん～だろう」（例文(1)）と「φ～だろう」（例文(2)）との比較を行い、「たぶん」の用いられる文脈の特徴について、BCCWJを用いて考察を行う。

2. 誘導副詞—先行研究

「たぶん」と「だろう」の共起頻度の高さは「副詞の呼応」と呼ばれてきた。呼応する副詞は、「分裂して」「誘導の機能」を担うとされる。

- (3)・時枝(1950:124)「云はば、陳述が上下に分裂して表現されたもの」
 - ・渡辺(1971: 311-312)「先行して、その真の否定表現・真の仮定表現を予告する」
- ここから、以下の予測が成り立つ。

- (4) 「たぶん」が使われるのは、「だろう」が文末に位置する文（「だろう文」）の後続が、先行文（「だろう文」に先行する文）からは予測しにくい場合である。

3. 考察の対象

ジャンルの影響が予測不能であるため対象を限定する（Bekeš 2012 など）。

- ① 「書籍」のみを対象とする（新聞、雑誌、白書、ブログなどは除く）。
- ② probably の日本語訳として、「たぶん」が使われる可能性があるため、①から翻訳を除く。
- ③ 話者が交替するという情報が「先行文」との関係に介在するため、②から会話文を除く。

4. 結果と考察（その1）— 「の／んだらう」との共起頻度の高さ

- (5) 「たぶん～だらう」: 81 例¹⁾
- (6) 「たぶん～の／んだらう」 56 例 (69%)、「たぶん～だらう」 25 例 (31%)
- (7) 「の／んだらう文」 そのものの出現頻度が高いわけではない
(「だらう文」中に「の／んだらう文」が占める割合は 20%程度)。

「の／んだらう」との共起頻度が高い理由

① 「の／んだらう文」は「原因推論」²⁾の結果を表示する

(木下 2013、田窪 2001、澤田 2006,2012、幸松 2007)。

- (8) 「電車が到着した (原因)」 → 「改札が混雑する (結果)」
- (9) 電車が到着したから、もうすぐ改札が混雑する{だらう／かもしれない／に違いない／はずだ}。
(幸松 2007 の例文(28))
- (10) 改札が混雑しているから、電車がついた{のだらう／のかもしれない／らしい／ようだ／
に違いない／はずだ}。
(幸松 2007 の例文(29))
- (11) 彼女の姿は見えない。多分、パソコンをつけっぱなしにして、何か別のことをしている
のだらう。
(世にも奇妙な物語)

②原因推論：「先行文」との結束性を保ちにくい。

「ある状況から、その原因根拠となる事態を推論するには、原則として何らかの論理関係表示が必要である」森山(1989: 71)

- (12) ? 部屋にリュックが一つ置いてある。彼は昨日山から帰った。(森山1989の例文(58))
- (13) 部屋にリュックが一つ置いてある。このことから考えると、彼は昨日山から帰った(の)
かもしれない。(森山1989の例文(59))
- (14) 部屋にリュックが一つ置いてある。彼は昨日山から帰ったのだらう。
(森山1989の例文(60))

上記①②から、「たぶん」は文頭で結束性を補強する役割を担っていると考えられる。

5. 結果と考察（その2）— 「の／んだらう」と共起しない場合

「の／んだらう」ではなく「たぶん～だらう」の形をとるものは 25 例((6)を参照)。

- (15) ①「先行文」に、「忘れた/わからない」などの表現がある場合 (4例)

②認識主体が変化する場合（8例）

③「これは何か」を述べる場合（内実推定）（4例）

④説明できない場合（9例）

①「先行文」に「忘れた／わからない」などがある場合（4例）

(16) いつ話したかも忘れてしまった。たぶん八月の終わりだろう。 （レテの支流）

(17) 場所の記憶はなかった。いつ話したかも忘れてしまった。たぶん八月の終わりだろう。
（野蛮な誘惑）

② 認識主体が変化する場合（8例）同じ事態についての認識が視点を変えて提示される場合

(18) 小暮の頭の中は、いつも仕事のことばかりで、自分を一人の女性として見てくれたことなど一度もない。たぶん、これからもないだろう。 （やんちゃくれドラマ）

(19) 父がヒップさんを信用していないこと、なるべく穏やかに断つてしまおうとしていることがぼくにはわかった。たぶんヒップさんにもわかっただろう。 （南の島のティオ）

③「これは何か」を述べる場合（内実推定）³⁾（4例）

(20) ステンドグラスが嵌めこまれた白いドアがある。その右に、白い鉄の格子で覆った窓。多分応接間だろう。 （泳ぎたくない川）

(21) オートロックがかからないように、隙間に本が挟んであるのが見える。多分聖書だろう。
（爆弾魔）

「内実推定」（背後の事実の推定）は「原因推論」の一種（木下 2013）

（「先行文」との意味のまとまりが示されにくい）。

④ 説明できない場合（9例）

(22) 仁は特別頷くこともなく、現れたときと同じ唐突さで立ち上がり、ふらりと喫茶店を出ていった。たぶん外に出て走れば、すぐ未来（人名：引用者の補注）に追いつくだろう。
（太陽と月のカタチ）

(23) おれはガラシアを愛している、と忠興は思った。が、あの女から解放されることも少しだけだが望んでいるのかもしれぬ。たぶんガラシアは死を選ぶだろう。
（群雲、関ヶ原へ）

(24) リンは引戸の前で立ち止まり、深呼吸した。たぶん店の主人や従業員たちは、この四日間のことを詮索してくるだろう。
（新宿のありふれた夜）

6. おわりに

「たぶん」は「のだろう」との共起頻度が高く、また、その他「先行文」との一貫性を保ちにくい場合に用いられる。このことから、「たぶん」は、誘導副詞として文頭において「先行文」とのつながりを示す役割を担っていると考えられる。

「たぶん」を伴わずに「だろう」や「のだろう」が文末に来る場合と、「たぶん」が使われる場合との比較、さらに「たぶん」「だろう」と類似した意味を持つ「おそらく」「であろう／でしょう」についての分析は、今後の課題として残される。

注

- 1) 検索条件「キー: 文頭一語、語彙素: 多分、後方共起: 文末から二語、書字出現形: だろう」
- 2) 「原因推論」は、「事態の存在や生起のしかたについての認識の型」であり、B類のカラ(1973,1993)で接続可能な関係のことを言う(木下 2013)。
- 3) 「内実推定」という用語は、岡部(2011)による。岡部(2011)は、近世語の「らしい」が推定を表す形式であるとし、推定に「内実推定」と「原因推定」があることを指摘している。「内実推定」は、広義で見れば、「原因推論」の一種である(木下 2013)。つまり「内実推定」も、「先行文」との一貫性を保持しにくい場合であると考えられる。

参考文献

- Andrej Bekeš (2012) “Suppositional Adverb-based Brackets in Discourse” 富谷玲子・堤正典編『神奈川県大学言語学研究叢書 2 モダリティと日本語教育』ひつじ書房 pp.21-37
- スルダノウィッチ, イレーナ・ベケシュ, アンドレイ・仁科喜久子(2009)「コーパスに基づいた語彙シラバスの作成に向けて—推量的副詞と文末モダリティの共起を中心に—」『日本語教育』142号 pp.69-79
- 岡部嘉幸(2011)「江戸語の推定表現」青木博史編『日本語文法の歴史と変化』くろしお出版 pp.195-213
- 木下りか(2013)『認識的モダリティと推論』ひつじ書房
- 澤田治美(2006)『モダリティ』開拓社
- 澤田治美(2012)「日英語の認識的・証拠的モダリティと因果性」澤田治美編『ひつじ意味論講座 モダリティⅡ: 事例研究』ひつじ書房 pp.63-82
- 杉村泰(2009)『現代日本語における蓋然性を表すモダリティ副詞の研究』ひつじ書房
- 田窪行則(2001)「現代日本語における二種のモーダル助動詞類について」『梅田博之教授古稀記念韓国語文学論叢』太学社 pp.1003-1025
- 時枝誠記(1950)『日本語文法口語篇』岩波書店(=1978 改版岩波全書)
- 南不二男(1974)『現代日本語の構造』大修館書店
- 南不二男(1993)『現代日本語文法の輪郭』大修館書店
- 森山卓郎(1989)「認識的ムードの形式をめぐって」仁田義雄・益岡隆志編『日本語のモダリティ』くろしお出版 pp.57-74
- 幸松英恵(2007)「時間的に逆行している推論に関する一考察」『日本語文法』7巻2号 pp.120-136
- 渡辺実(1971)『国語構文論』塙書房
- 用例の出典
現代日本語書き言葉均衡コーパス 中納言 (BCCWJ)